

福成会の

ちよっと素敵なお話

「うちの店員が

どうかしましたか？」

No.11



「お客さん、うちの店員がどうかしましたか？」

私はラーメンが好きだ。ラーメン屋巡りが好きなのか、自分でスープから仕込んだりもするのでラーメン自体が好きなのかはわからないが、某感染症が猛威をふるう以前は年間百回以上どこかしの店に行っていたほど好きだ。

そんな私がAさんと出会ったのは四年前のことだった。

内向的であるが話してみるといろいろと世間話の弾む青年。Aさんは私が勤務する事業所の自立訓練に所属しており、自立訓練は二年間の有期限のため、あと一年で別の進路を選択しなくてはいけない時期だった。

家族はAさんの性格や特性上、ゆったりペースで長く楽しく過ごしていけるところで、次のステップを目指すことになればシフトチェンジしやすい事業所に進むの

が良いのではと三者面談のときに話していた。

先に言っておくが、家族の意見が間違っていたわけでは決してなく、何が正しかったとかいうつもりもない。家族が想っていたより、Aさんの気持ちが強くて芯を持っていたということ。

というのも、私と出会う前に事業所に来たAさんが、利用当初から抱いていた思いの一つに「ママとディズニーランドに行きたい。僕が稼いだお金で。」というものがあつた。母親が当時それをどこまで本気で捉えていたのか今はもうわからないが、必要なお金を少なく見積もって十万元以上必要な金額である。

自立訓練の毎月の工賃は千円程度、家族が進路先として考えていた就労継続B型で一万円くらいだったため、貯金していても何年かかるのだろうか、といったところだった。

いろいろな事業所に見学に行き、実習に行き、その後に振り返り面談を実施した。作業場に入れず、先方から「今日は作業に取り組めなかったです」と報告をもらうこともあった。

「作業しんどかった」「緊張して帰りたかった」「将来何したいかわからん」、色々とAさんから感想を聞いてどのような事業所ならマッチするのかと考えていたが、Aさんのデイズニーランドの野望は消えることは一度もなかった。働くためのエネルギーは、その動機だと私は思う。

Aさんの場合、デイズニーランドがまさにそれだった。ならばそこを最大限プッシュしようじゃないか。逆算して考えていった。

デイズニーランドに大人二人が行く計画を立てるところから個別のプログラムで一緒に調べる。

「夜行バスはママしんどいと思う…」

「パパにお土産これとこれ…」

「プラスアルファでさらに経費が…」

「これだけお金が必要」

「何年後に行きたいか、だったら月にいくら稼がないといけないのか…」

「進路の選択肢は」

「休んだり作業に参加しないのはマズいな…」

そうやって漠然とした野望が少しずつ形を作っていった。

Aさんが選択したのは月額平均四万円台の給料が狙えるがつつり働くタイプの就労継続B型だった。事業所の中でもかなり作業に力を入れた…というか働くことを最優先の事業所。

最終選択肢の中には就労継続A型もあったほどだった。

家族は当然最後まで「もっとマイペースに行けるところでも良いのでは…」と言っていたが、面談でAさんの意志とやる気・モチベーションをお伝えすると納得して帰られた。小柄なAさんの背中が大きく見えたような気がしなくもなかったような。

それから二年が経過して、世間は感染拡大による自粛ムード。当然私も外出の機会を減らしたが、ちよこちよこ週末にラーメン屋訪問はしていた。

阪神間にある博多系のチェーン店で器が運ばれてきた際に店員さんから声をかけられた。その店員さんは私に話しかける前からすでに涙ぐんでおられた。

Aさんの母親だった。

パートで働いていて、ちやうど客も少ない時間だったこともあり、母親が近況を教えてくれた。

あれから半年で予定金額が貯まったこと、感染症が収まったら一泊じゃなくて二泊、三泊できるくらい貯まった。

「デイズニーランドだけじゃなくデイズニーシーも行っちゃう？って息子が言うんです、すごく楽しそうに毎日休まずサボらず仕事に行けているんです。感謝しています…。あの時違う施設を選んでいたら、こんなにしっかり働いている息子を見られなかったかもしれない…」と泣いてしまわれた。

Aさんの気持ちが強かったんですよ、僕が頑張ったわけじゃないですよと言っていると、決して陰険なクレームをつけたわけではないのにそんな場面を見て厨房か

らいかにも屈強な店主のようなスタッフがやってきて、冒頭のセリフ。危うく出禁になりかけた。

翌週すぐに電話。相変わらず小声で話すAさんだったが、

「ママが来たって言っていたよ。」

仕事を頑張っていると聞けたことで、電話越しでニヤニヤしてしまった。

出入りの多い事業所ならではの【近況報告】を聞くことができました。

焦りと同時にほっこりした話でした。

Aさんだけでなく事業所から離れた利用者さんとはどうしても疎遠になってしまいがちだが、定期的に連絡しよう、そう思ってからは「最近どうですか？」と連絡するようになった。

そんなきっかけのお話でした。